

# 正月



正月は、祖霊でもある年神様をお迎えし、新しい年の豊穰安泰を祈る行事です。かつて、1月1日の初日の出とともに年神様が1年の幸せのために降臨すると考えられていました。この神様は「正月様」とも呼ばれており、「1月」ではなく「正月」と呼ぶのは、この神様の名前に由来します。つまり、正月も盆と同様、祖霊や神様のお祭りなのです。

「亡き人のくる夜とて魂(たま)祭るわざは、このごろ都にはなきを、東(あずま)の方には、はほする事にありしこそ、あはれなりしか」  
 (『徒然草』兼好法師 第19段)

とありますが、これによると昔大晦日の夜は、魂のお祭りであったことが窺えます。大晦日はその神様や魂を迎える大切な前夜となり、なんとなく神聖な気分になります。これはクリスマスの前夜祭がクリスマスイブであるように、また万聖節の前夜祭がハロウィンであるのと同様に、正月の前夜祭が大晦日にあたるので、神聖な気分になるのもわかります。いずれも霊を迎える行事で、洋の東西と問わず、文化や習慣、民俗のしきたりの共通点を見出すことができます。

年神様をお迎えするときは、門松や飾り花などを玄関や居間に飾り準備をします。年末の一夜飾りは縁起が悪いとされるのは、年神様をお迎えするのに、前日に慌ただしく行うのは失礼とすることからです。また、葬儀の飾りを一夜飾りすることからも、正月の一夜飾りは忌み嫌われています。更に、12月29日に飾り付けをするのも「二重の苦(九)」に通じることから12月28日までに飾るか、30日に行うのが一般的です。

ちなみに、旧暦でいう正月1日は現在の2月中旬から下旬ころに当たります。正月を春といたり、迎春と表現するのももっともなことです。

## 正月のしきたり あれこれ

### 初詣

本来は氏神様をお参りするものです。以前は、一家の家長は大晦日の夜から自分たちが住んでいる地域の氏神社へ出かけて、寝ずに新年を迎えるのが習わしでした。地域によっては、初詣が終わるまでは誰も口をきかないなどの風習もあります。また、その年の干支によって年神様のいる方向(恵方)が縁起がよいとして、恵方に当たる社寺に出かけ初詣をするようになりました(恵方参り)。現在はこの恵方参りの習慣は薄れ、全国各地の有名な社寺に初詣に出掛ける人が多くなりました。

### 門松

正月には門の左右に一对にして並べます。玄関に向かって左側の門松を雄松(おまつ)、右側を雌松(めまつ)と呼びます。門松は常緑樹で青々と枯れないところから「栄木」とされてきました。また、松は群生しても光を取り込み明るいことから、「神の依り代(よりしろ)」(=神様の通り道)として神聖視されてきました。

同様に竹も「神の依り代」と考えられてきたことから、二つを合わせ神様が迷子にならないように目印として門や玄関に立てます。門松を立てるのは一般的には1月7日までです。

門に植物を飾る習慣は奈良時代からありましたが、当時は松に限らずシキミやアセボ、榊(サカキ)、杉など周辺で取れる常緑樹を使っていました。松が使われるようになったのは平安時代末からです。天才や疫病、強盗、貴族たちの権力抗争など乱世が続くこの時代において、ちょうど浄土宗が流行し、未来に希望を持つようになった庶民は、年神様を家に呼んで幸せにしてみらおうと、門松を立て始めたのです。鎌倉時代になると武家社会では松とともに竹を立てるようになり、魔除けとしました。江戸時代には幕府が三河地方から松を取り寄せ、豪華な門松を飾ったことにより、大名家ではこそって派手な松飾りを立てました。左右対で使われるようになったのは、江戸時代からです。

### お年玉

現在では大人が子どもに与えるものになっていますが、元々は神様に捧げたお餅を、神様からご利益として分けて頂いたものとして家族に与えることから始まりました。神様に供えるおひねりのことやお供えのものを分けることを「年玉」と呼んでいましたので、ここに語源があるようです。そもそも現金ではなく、お米や昆布、お餅などのお供え物が「年玉」だったのです。お年玉は、年神様の祝福を受けて、賜るものなのかもしれません。

### 注連縄(しめなわ)/注連飾り(しめかざり)

注連縄は神棚などに飾り、神様を迎える場所であることを明確にするためのものです。注連縄が張り巡らされた木や岩、或いはその一帯は清浄で不浄は入れないという印なのです。

正月に玄関口などに施す注連飾りも注連縄同様、年神様を迎える神聖な場所であることを示すものです。かつては、「年男」と呼ばれる家長が注連縄を家の中に張っていましたが、現在では注連縄を張る文化自体も簡略化され、注連飾りや輪飾りになっていきました。